

平成 24 年度 海外臨床薬学研修報告書

「日本の薬剤師と薬学生 - 今と未来を考える - 」

研修期間：平成 24 年 6 月 10 日～6 月 24 日

研修先：サンフォード大学薬学部

薬学部薬学科 6 年

070973131

後藤 綾

大学に入学して間もない頃、アメリカの薬剤師について授業で学んだ事があった。アメリカは進んでおり、日本はより多くの事を取り入れていくと良いと思った。しかし5年次に長期実務実習を経験したことから、アメリカの医療について間接的ではなく直接見て日本との相違点を考察し、自身の将来に繋げていきたいと思った。また学生という視点から薬学部の教育について考える良い機会となるのではないかと思い参加を決意した。

平成24年6月10日から24日に行われた2週間の研修では、午前に学生10人が小さなグループに分かれ、アラバマ州のサンフォード大学とその関連医療施設を見学し、午後からは全員で大学の講義を受けた。

まず私は St Vincent's Hospital、St Vincent's East Hospital という総合病院を見学した。ここでは、医師、医学生、薬学部教員、薬学生が一つのチームとなり毎日ラウンドを行っていた。薬に関しては薬剤師という医療従事者からの認識が出来ており、信頼関係が築けているように感じた。その例として、ワーファリンの投与量は薬剤師が作成した独自のプロトコルを採用していたり、抗菌薬の投与計画を薬剤師が考え医師に提案し、決定されるという場面を何度か見る事があった。薬剤師としての責任感とやりがいがあるように感じた。また、医師が薬剤師だけでなく薬学生に対しても意見を求め指導を行っている場面に遭遇し、チームとしての一体感に大きな違いを感じた。

さらに、薬学生も日本とは異なっていた。アメリカの薬学部4年生(日本の学部6年生に当たる学年)は朝7時から患者情報を集めてラウンドに参加していた。ガイドラインも覚えており、先生からの質問に対して間を空けずして答え、薬剤師のように同行していた。ラウンド後も宿題を含め勉強を怠らない日々を送っているという。日本の実務実習においても、患者の検査値を確認しそれをもとに薬剤師と話し合う点では変わらないと思った。しかしアメリカの実習現場を見ると、日本は実習というより見学という意味が大きいのではないかと感じてしまった。この違いの背景には、アメリカの薬学生が持つ、薬剤師に対する強い気持ちがあるのではないかと考えた。日本ではこのような強い気持ちを持って実習に臨む薬学生がアメリカと比較して多くないように感じる。私たち一人一人の意識も大切だと実感することができた。

しかし日本らしさ、良さについても気付くことができた。一つ目は衛生についてである。アメリカではマニキュアをしていたり、白衣のボタンを開けている医療従事者を見る事があった。医師が患者と接する時にも手指消毒を行っていなかったように感じた。二つ目は患者への関与についてである。アメリカでは患者情報について検査値や薬剤を中心に話が進んでおり、患者の主訴や心理面など深く細かい部分について話題に上がっていなかったように思った。服薬説明も日本のように資料を用いて長い時間をかけ行っている様子はあまりみられなかった。国柄もあるかもしれないが、これらの点において、日本はより患者の立場に立って患者と向き合っているのではないかと考えた。

次に、私は FMS pharmacy という医療用医薬品や OTC 医薬品を扱う地域の薬局を訪問した。この薬局では月2回ほど無料の糖尿病教室を開いており、実際私たちも参加することができた。日本の糖尿病教室とは異なり、薬剤師と薬学生、患者4名がテーブルを囲み、病気や治療、生活に

ついて悩みを打ち明けていた。薬剤師は糖尿病に関連する質問を患者に投げかけ個々の意見を聞きアドバイスを行っていた。日本では受動的な授業形式のものしか見たことが無かったため、患者参加型である糖尿病教室に驚いた。現在慢性疾患のアドヒアランスが日本に限らず共通の問題となっていると思う。今回その解決策として、患者で悩みを共感・共有し合う場を薬剤師が作り、患者からの信頼を得て薬物治療を支える、地域に密着した取り組みを見ることができた。今後日本でも、このような方法を取り入れながら独自の糖尿病教室を作っていくと良いのではないかと感じた。

今回の研修を通して心に残った事は、サンフォード大学の先生からのメッセージである。十数年前はアメリカにおいても、薬剤師が薬や投与量について医師に提案しても、見向きもされず却下されていた。しかし、薬剤師の職能を高めるため、積極的に薬に関与し活躍の場を広げ、医師に認められるようになってきたという。サンフォード大学の先生から施設見学の最後に「日本でも貴方たちが努力して薬剤師の状況を変えていって下さい。」という言葉を受け、私たちも薬剤師間で協力し、より頼りにされる薬剤師を目指していきたいと改めて感じた。そのためには、薬剤師は自分たちに出来ることを積極的に医療従事者に示していき、医療における薬剤師の必要性をより示していく事が大切であることを実感した。同時に患者の薬物治療の故出た結果に対して責任を持つことが必要だということも気付くことができた。今回学んだアメリカの良い所を取り入れ、日本の良さや混ぜ合わせ、日本独自の薬剤師を作り上げていくと良いのではないかと考えた。また、未来の薬剤師である薬学生の教育も重要であると感じた。薬剤師になる、そして薬剤師として患者さんのために働くという強い気持ちを持つことができるような教育の必要性を実感した。薬学生に対して早期から薬剤師や他大学の薬学生と出会い、刺激を受けるような機会を増やしていくと良いのではないかと感じた。

今回大変充実した 2 週間を送ることが出来たと思う。このような貴重な機会を与えて下さったサンフォード大学の先生方、引率の亀井先生、黒野先生、そして共に研修期間を過ごした大切な仲間である参加メンバーに感謝したい。